

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 22 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770274

研究課題名(和文) 中世・近世アイヌ文化における内耳土鍋の考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological Research of Naiji Pottery in Ainu Culture

研究代表者

鈴木 建治 (Suzuki, Kenji)

北海道大学・文学研究科・共同研究員

研究者番号：00580929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、サハリン島で内耳土鍋(器体内部に環状の取っ手をもつ土器)が出現する時期について検討した。内耳土鍋研究は、北海道・サハリン島・千島列島におけるアイヌ文化の成立過程を考える上で、非常に重要な研究分野である。研究の結果、サハリン島で内耳土鍋が出現した時期は11世紀中頃から13世紀前半であることが判明した。

研究成果の概要(英文)：This research analyzes the date of the appearance of pottery with inner lugs, known as Naiji pottery, which is found in Sakhalin island. The research of Naiji pottery is very important in considering the formation processes of Ainu culture in Hokkaido, Sakhalin island, and Kuril islands. The results of the analysis show that Naiji pottery appeared in Sakhalin island from the middle of the 11th century to the first half of the 12th century.

研究分野：北東アジアの物質文化史

キーワード：アイヌ 内耳土鍋 北海道 サハリン島

1. 研究開始当初の背景

(1) 北海道を含む北方地域に分布する中世・近世アイヌ文化の内耳土鍋の研究は、アイヌの基層文化である擦文文化・オホーツク文化の終焉や和人地・大陸との交易体制の再編成といった、アイヌ文化成立過程の問題を考える上でのその学術的価値は現在まで保っている。しかし、今のアイヌ研究では、内耳土鍋を「鉄鍋の模倣品・代用品」という一面的な認識でしか理解していない。本研究では、これまで手薄だったロシア側の資料を集成・追加することで新たな発見を導き、日本側と比較検討することで、北方地域に展開していた内耳土鍋の実用的役割と文化的・社会的役割の変遷を明らかにし、中世・近世アイヌ文化の地域的な多様性を描き出すことを目的とする。

(2) 中世・近世アイヌ文化でみられる内耳土鍋関連の学術資料は、遺跡出土の「考古学的資料」の他に、古文書・公文書等の「文献資料」、アイヌからの聞き取り調査等による「民族誌学的資料」、アイヌ口承文芸等による「文学・言語資料」と多岐にわたっている。内耳土鍋の基本資料は、考古学的資料としての「出土品」で構成されているため、研究は他分野の資料も援用しながら考古学分野主導で進められてきた。

(3) 内耳土鍋研究の歴史は古く、19世紀末まで遡る。内耳土鍋の出現過程や地域内での変遷過程に関する基礎的な研究は、20世紀前半に集中的に提示されてきた。それは、アイヌの基層文化である擦文文化・オホーツク文化の終焉と中世アイヌ文化の成立の問題に接近する「北方地域最後の土器文化」として語られてきた(新岡 1937、馬場 1940 など)。しかし、20世紀後半になり研究数は激減し、そして21世紀に入り近年では、内耳土鍋研究自体が行われぬ事態におちいってしまった。その決定的な原因は、研究対象である内耳土鍋の数が日本国内において増えている点にある。かつての内耳土鍋研究は、和人製作の鉄製鍋である内耳鉄鍋・吊耳鉄鍋研究と共に歩んできた。しかし、行政発掘調査の急増の結果、土鍋よりも鉄鍋が圧倒的に出土したことで、土鍋研究が停滞し鉄鍋研究のみが活発化するという差が生じてしまった。新しい土鍋研究成果が提示されないまま、現在では、アイヌ文化における土鍋とは、「鉄鍋の模倣品・代用品」であり、鉄鍋の流通が滞っている地域のみにも長らく存続していたものという、いわば「時代遅れ」あるいは「後ろ向き」な一般認識が確立・定着してしまった。

このようなアイヌ文化の中の内耳土鍋に対する現状認識を変えるべく、本研究を実施した。

2. 研究の目的

(1) 新たな内耳土鍋資料を加えた編年と地域的特徴の再構成。

内耳土鍋の編年と地域的特徴は、20世紀前半の馬場脩や新岡武彦の研究成果に準じており、全体の相対的な年代観や特徴は現在においても大きな変更はないと考えられる。しかし、旧ソ連・ロシアの考古学的資料の質と量が、樺太とカムチャッカ半島南部の発掘調査の増加により20世紀前半の段階とは異なり、北海道周辺地域の特徴が以前よりも増して理解されてきた。また、これまでの編年案で使用されていた樺太の資料の多くは表面採集資料であったことを考慮すると、新たなロシア側の発掘調査資料を分析・整理することで、もっと正確な編年と地域的特徴を把握することができるであろう。このようなロシア側の研究動向を加えることにより、これまでの日本側中心の資料で構成された編年・地域的特徴を修正することが可能になると考えられる。

(2) 内耳土鍋における実用的役割以外の「文化的・社会的役割」の存在。

内耳土鍋は鉄鍋の模倣品・代用品であるという一般認識だけで、アイヌ文化における内耳土鍋のすべてを語る事が出来るのかと言えばそうではない。樺太や千島列島・カムチャッカ半島南部という北海道周辺地域でみられる近世期終末まで土鍋を使い続ける意味は、調理器具としての機能的側面のみだけでは説明できないであろう。なぜなら、この周辺地域においても活発な交易関係が和人地と大陸側とで結ばれており、鉄鍋の流通が存在するからである。鉄鍋の普及率の高低差も勿論考慮されなくてはならないが、鉄鍋が存在している中、あえてアイヌ自身が土鍋を製作・使用し続けてきた事実に、実用性を越えた何らかの文化的・社会的役割が存在したのではないかと仮定することができる。本研究では、この仮定を検証しその存在を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 型式学的分析による編年と地域的特徴の再構築作業。

日本・ロシアの研究機関に収蔵されている確認可能な内耳土鍋を観察・記録(実測)することにより、これまでの土鍋型式の時空間的変遷過程を再検証する。土鍋の属性を「規格」・「文様」・「耳形」・「耳数」・「器形」・「保護耳」に分類して型式設定を行う。特に、「文様」の属性に関しては、以前から報告されているが、その系統関係が具体的に検討されてこなかった点を考慮する必要がある。樺太出土の土鍋に関しては、知られざるロシア側の資料を加えることで、その技術的・形態的特徴が以前よりも明らかになることが想定される。型式の再検討が最も必要な地域である。樺太系の土鍋を詳細に再検討することで、北

海道と千島列島・カムチャッカ半島南部といった他地域への関連性や影響の有無を追及できると考えられる。

(2) 土鍋附着物を使った AMS¹⁴C 年代測定による絶対年代からみた編年案の構築作業。
内耳土鍋の基本的な編年作業は型式学的分析により作成されるが、本研究では AMS 法を用いた ¹⁴C 年代測定分析も行い、そこから得られた年代を反映させる。内耳土鍋の考古学的資料の問題点のひとつに、表面採集資料の数が多く含まれている点がある。また、発掘資料に関しても発掘調査自体が 20 世紀前半に行われた事例が多く、層位的状況の記載が不十分である資料も少なくない。このような出土条件の問題や、また内耳土鍋の体系的な年代測定値が得られていない現状も考慮して、絶対年代からみた編年案の構築作業を採用する。また、炭素・窒素安定同位体分析もあわせて実施することで、海洋リザーバー効果の影響を受けているかどうかも検討し、年代測定の信頼度を高めた。

(3) 遺跡内空間分析による内耳土鍋をめぐる人間行動の復元作業。
型式学的分析で得られた結果に基づき、遺跡内における土鍋と他の遺物との空間的配置関係を分析する。そして、内耳土鍋出土パターンの普遍性と特殊性を見出し、土鍋の製作・使用から遺棄・廃棄までの人間行動を復元する。まずは土鍋の出土地点における原位置性を検証し、土鍋の空間的配置性が「活動空間内外に配置する遺棄的行動」あるいは「活動空間内外に意図的に配置する廃棄的行動」に起因するののかについて、遺跡形成論的視点から検討する。そして、土鍋と他の遺物との空間的配置関係を検討する。土鍋と関連性の強い遺物・遺構あるいは弱い遺物・遺構を選別・パターン化することで、遺跡内で起こった土鍋をめぐる人間行動の普遍性と特殊性を復元する。そこから土鍋の機能的・文化的・社会的役割を考察する。

4. 研究成果

(1) 東北地方北部から北海道道南部に入ってきた内耳土鍋文化は、北海道最北端部である稚内へは 11 世紀前半～12 世紀中頃には到達していたことが判明した。その年代観は、道南地域と大きく変わらないことが理解され、内耳土鍋文化が北海道内に急速に拡散した状況が想定できた。

(2) 内耳土鍋文化は、11 世紀中頃～13 世紀初頭にはサハリン島に到達しており、更にサハリン島における内耳土鍋分布の最北端地域にあたるポロナイスクへは 13 世紀代には到達していることがわかった。従来の年代観より古くなることが判明した。

(3) 年代的に新しい形態的特徴を持つ内耳

土器と考えられていた資料が、想定よりも古い年代を測定した。今後は検討資料数を増やし、その検証をおこなう必要がある。

(4) 内耳土鍋の技術的・形態的特徴の分析では、特徴差と年代差に関連性が薄いことがわかり、今後は地域差の可能性も含めて検証する必要があると考えた。

<引用文献>

新岡 武彦 1937 「樺太の内耳土鍋」『人類学雑誌』 52-3。
馬場 脩 1940 「日本北方地域及び附近外地出土の「内耳土鍋」に就いて」『人類学・先史学講座 14』(再録:馬場 脩 1979 『樺太・千島考古・民族誌 3』北海道出版企画センター)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)
田村 将人・鈴木 建治 「ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所にある樺太旧蔵書について」『北海道・東北史研究』 査読無 第 10 号 2015 1-8 頁。

鈴木 建治 「千島アイヌに渡った陶器」『北大史学』 査読無 第 55 号 2015 43-54 頁。

鈴木 建治 「千島アイヌの石ランプ」『北海道考古学』 査読有 第 50 輯 2014 151-166 頁。

高瀬 克範・鈴木 建治 「馬場コレクションの再検討 北千島の竪穴住居・土器・石器の基礎的研究」『北海道大学文学研究科紀要』 査読無 第 140 号 2013 1-56 頁。

〔学会発表〕(計 3 件)

鈴木 建治 「在サンクトペテルブルクの A.V.グリゴリエフ・コレクションについて」日露国際研究集会・コレクション形成史からみる日露関係史 2016 年 7 月 10 日 北海道大学(北海道・札幌)。

鈴木 建治 「北海道北部・サハリン島における内耳土器の出現期の再考」北海道考古学月例研究会 2016 年 2 月 20 日 北海道大学(北海道・札幌)。

鈴木 建治 「北海道オホーツク海沿岸出土の内耳土鍋の再検討」第 15 回北アジア調査研究報告会 2014 年 3 月 2 日 札幌学院大学(北海道・江別)。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

取得状況（計0件）

〔その他〕

6．研究組織

(1)研究代表者

鈴木 建治（SUZUKI, Kenji）

北海道大学・文学研究科・共同研究員

研究者番号：00580929